

福音主義教会における説教  
—日本プロテスタント・キリスト教史における説教  
(山口論文への応答として)—

正木牧人

序

昨今日本各地で説教についての学びが多く開かれている。そんな中、2011年秋に開かれた第十四回日本福音主義神学会全国研究会議は、あえて主題として「説教」を取り上げた。テーマに取り組む特徴として、説教を、その聞き手、聴衆に確かに伝えるコミュニケーションという側面、更に、説教によって聞き手の心と行動を変革するトランスフォーメーションという側面を検討するものとなった。

山口陽一氏の講演論文「福音主義教会における説教——何を、誰に、どのように語って来たのか：日本プロテスタントキリスト教史における説教」は、興味深く有益であった。「福音主義教会における説教は聖書の説き明かしである」と、まず冒頭で説教を明快に定義する。更に、説教は教会形成と神の国の実現をめざす、と言う。すなわち、すべての人に語られる説教が、それによって悔い改めと信仰に導かれた人々を更に教会の民として導き、神の国実現に進ませるのである。説教は神の御旨を実現し、神の栄光をあらわす。

碩学の教会史家、雄弁な説教者、そして説教者・牧会者を育てる教育者である山口氏の論文は、正確かつ膨大な知識が活かされ完成度が高い。同氏が丁寧な吟味を経て選定し提供している著名な人物の説教の内容によって、私たちは説教にかけた彼ら先達の情熱と努力を知る。自らの説教への取り組みの未熟さ

を反省しながらも、目前に開かれた未開拓の研究分野への関心が高まるのを感じる。

## 1. 課題の把握

山口氏の論文は、二つの点で全国研究会議の準備委員のねらいに込んでいる。まず時代のとらえ方において委員の趣旨をくみ取っている。

日本福音主義神学会はこれまでに「福音主義の聖書解釈と説教」という主題の全国研究会議を開き、聖書の解釈や釈義の側面から説教を研究した。そこで今回は角度をかえて、説教の伝達とその効果に注目した。いったい私たちは聞き手である聴衆に伝わるメッセージを語ってきたのか、また、それは単なる知的理解として到達し定着するのではなく聞き手の心と行動を変革するダイナミックな説教であったのか。これらのことの検証が企てられた。準備委員はそれを一般論としてではなく、むしろ今日の時代性という枠の中で具体的に検討する志を立てている。山口論文はこのような狙いに込めて、日本キリスト教史という時代的背景の中で活躍した諸説教者のあり方を掘り下げる構造を取った。

山口論文が準備委員の期待に込んでいる第二の点は、説教者の人格面への着目である。説教の伝達やその効果を今日の急激な社会の変化という文脈で考えると、つい説教の聞き手のあり方やこれまでとは違うコミュニケーションのテクニック、ツールの変化にのみ注目してしまう危険がある。しかしそんな時代だからこそ鍵を握るのは、語る者である説教者自身のあり方、すなわち、神の言葉に聞きつつ聖霊の働きに大胆に期待して福音を語る人格の持つ影響力なのである。

ポストモダンの時代と言われる今日、世には多元主義や相対主義の思想・哲学が浮流している。ITの発達によって人と人とのコミュニケーションのあり方がより希薄になり、ゲーム化して、バーチャルな仮想現実の世界での交流となりつつある。私たちが時代の変化に敏感であり、またメッセージの提示の方法やそのために用いられる手段の移り変わりを知ることは大切である。山口氏はこの点を無視しない。時代にふさわしいレトリックやコミュニケーションツールの用い方に加え、新しい課題にも敏感である。世代間のギャップが異文化と

して広がり、母国語が違う人々に同時に語るというグローバル化によってもたらされる複雑なことをも考察に含めた上で、より成熟している者やより人数的に多い者が、より未熟な者や少ない者を配慮しつつ、謙遜に愛をもって柔軟に対応する必要を説いているのである。しかし、それらの提言は節度を持って語られていて、論文の発題の中心を占めていない。発題の中心軸はむしろ説教を語る者の人格のもつインパクトであろう。これは研究会議の趣旨の正しい理解の故の選択である。

以上のような、時代性と人物に着目して、山口氏は日本のプロテスタント教会の説教者を四期にわけて考察する。開化期から大正デモクラシー期からは最初期の説教者の奥野昌綱と明治期の第一世代の説教者、大正期から昭和前期の説教、戦中から戦後の説教、そして今日の説教の四期である。各時代に複数の説教者を挙げている。引用は教派を超えた諸説教集が参照され、奥野昌綱、小崎弘道、宮川経輝、海老名弾正、植村正久、内村鑑三、山室軍平、バックストン、朱基徹、田中剛二、小畑進らを扱うのである。

さて、日本福音主義神学会は1970年に設立された。同会は現代の日本という時空の脈絡の中で、聖書の十全靈感を信じる立場に堅く立ち、厳密な学問的解明と弁証をもって、健全な教会の形成と強力な福音宣教に必須の福音主義キリスト教神学を営む学会である。このような神学会にとって、山口氏の発題論文を一貫して流れる「日本の説教者」と「教会と国家」への焦点はいかなる妥当性を持つのであろうか。この問いを携えつつ、四十余年にわたって日本福音主義神学会が懸命に取り組んできた課題を振り返りながら、特に説教者のあり方を考察することで山口論文への応答としたい。

## 2. 日本福音主義神学会の取り組みと山口論文の意義

日本福音主義神学会は保守的な聖書信仰に基づいて時代にふさわしい福音宣教を課題として取り組んできた。1980年、創立十周年にはカール・ヘンリーを招き研究会議を開いている。このときにコンテクスチャライゼーションという言葉が紹介された。1983年11月に開催された第二回全国研究会議の主題は「今

日における福音主義聖書論」であったが、その第三部で実践的適応として「釈義と説教」について議論している。

また、その二年後、創立十五年にあたる年、すなわち1985年の11月にもたれた第三回全国研究会議は御殿場東山荘において百十二名の参加を得て開催されたが、その主題は「福音主義聖書解釈と説教」であった。ここでは聖書解釈・釈義上の新しい発見や洞察をどのように説教に結実させていくかが中心的に検討された<sup>1</sup>。

同会議は五部構成からなっていた。第一部で旧約聖書、新約聖書の分野での福音主義の聖書解釈が検討された。分科会方式の第二部では「釈義から説教へ」というテーマが掲げられ、歴史的・文法的・批評的解釈と説教、釈義から説教における聖霊の働き、釈義から説教における教会の位置づけ、説教のための資料の利用というサブテーマに分けて討議された。第三部は講演で、「神の言葉と説教」というテーマで入船尊氏が日本人に伝達し効果を上げるための説教者の研鑽のあり方を語った。第四部では実践神学における説教と題して二つの発題がなされた。そして、第五部は総括である。

### 1) 日本人の文化や宗教性とキリスト教の説教者

日本人とキリスト教の説教ということを考える場合、少なくともふたつのことを考えなければならないであろう。もちろん両者は排他的な二分野ということではないが、ひとつは日本人の文化論や宗教性との関連、そしていまひとつはキリスト教会と日本の国体との関係を「教会と国家」の文脈で考えることである。日本福音主義神学会はこの両者を射程に入れて検討してきた。

第一の宗教的文化的配慮の例を挙げる。これはこのたびの研究会議の主題にも関連した点である。先に紹介した第三回全国研究会議において第三部講演を担当した入船尊氏は講演の目的を説教を聞く聴衆を視野に入れて設定している。伝道と教会形成における説教を、語りかける対象、日本という精神的、宗教的土壌の中で考えるのである。入船氏は語る。「会衆をして生ける神の前に立たし

<sup>1</sup> 『福音主義神学』第17巻1986年に第三回全国研究会議の特集が組まれている。

め、罪を自覚させ、その罪人に対する、神の取り扱い、救いの確かなことを知らしめ、主との関係を深めさせること、説教の任務は、究極的にはこのことにつきまします。まことに畏れ多い、重大なつとめでありますが、このことなくしては結局のところ、日本伝道の前進もありません。」<sup>2</sup>

では日本人にどう語るのか。「対象にわからせることをぬぎにしては何事も始まらない。何事が起こるためには、何はともあれわからせなくてはなりません。対象の理解を得なくてはなりません。そのためにこそ、私たちは、対象への理解と洞察を必要としているのです。このための、たゆみない努力をぬぎにしたところで、よくわかる説教が成り立つことはあり得ないでしょう。もう少し一つの例で具体化しますならば、神の唯一性も、人格性も、絶対性も考えたこともなく生きている日本人に、聖書の神を語る時、このお方がどういうお方であるのかを説明するとき、彼らの迷いや、先入観や、不合理性に対して、考えられるあらゆる角度から語って行かなくてはならないということです。……そうでないとき、私たちの語ることは、対象の頭上をかすめて過ぎ去ることになるでしょう。」このように入船氏は聴衆である日本人の理解なしに説教は心に届いていかない、と語る。しかし入船氏はそう言いつつも同時に、説教者は聴衆の世界に生きなければならないことを教える。「愛をもって他者の全思想と表象の世界へと自らを引き入れることである。」この要約はH・J・クラウスの説教論の引用である<sup>3</sup>。

入船氏は日本伝道の壁を打破する鍵となるふたつの提案をする。ひとつは、これまで欠けていた日本人の精神史や諸宗教の研究をすることである。日本はキリスト教の基本的な事柄の理解を持たない社会である。そこで説教が人々の心に届くためには説教で取り上げることがら理解できるように整えていくという教育的側面が必要になるからであり、教育は既知のことから未知のことへと導いていくことで効果があがるからである。今ひとつは、説教者が日本人と

<sup>2</sup> 入船尊「神の言葉と説教」前掲書、31頁

<sup>3</sup> H・J・クラウス 佐々木勝彦訳『力ある説教とは何か：H・J・クラウス説教論』日本基督教団出版局、1982年、97頁。入船論文の中で引用されている。

してふさわしい健全な話し方、伝達の仕方を自覚的に学び修練すること、すなわち日本的パブリック・スピーキングの-artを鍛えることである。

入船氏のこれらの二つの提案は、説教の伝達と効果を考えるこのたびの神学研究会議の課題に応えるものである。福音の伝達のためには、その伝達の対象をよく知り彼らに理解されるように語ること、またその語り口も同一文化圏の者同士という緊張感のない甘えや心の隙を許さない日本的な話し方において説教者は修練していくことは二十七年を経た今日にも妥当する勧めである。

入船氏の第二の提言の日本的パブリック・スピーキングの-artについて先に取り上げる。日本には多くの話芸がある。しかも、日本の話芸のルーツは伝道説教であったことがわかっている。

日本的な「話芸」として知られる「話す芸」の落語・講談・浪曲や、「語る芸」の平家琵琶・浄瑠璃・浪花節などは、真宗系の仏教の布教のための説教から派生しているようだ。「話芸」という言葉の創始者でもある関山和夫氏の説教話芸の研究で明らかになってきたものだが、このような話芸のかなめは節談説教といわれる説教に必要とされる技術、すなわち「ことばに節、すなわち抑揚をつけて、洗練された美声とゼスチャーをもって演技的表現をとりながら、聴衆の感覚に訴える詩的・劇的な情念の説教」を語る技法である。

もともと仏教の積極的な布教活動であったものが、民衆の娯楽の要求に応えることのできたすぐれた芸能として受け入れられていった<sup>4</sup>。このような話芸は、明治時代以降の廃仏毀釈運動や教団の近代化の中で途絶えかけていた。しかし近年になって関山和夫氏の著書に感銘を受けた俳優の小沢昭一氏により復活したのである。

拡声器のない時代、聴衆が埋め尽くす本堂の隅々まで届く太く幅のある声、白声は、激しい訓練で一度つぶしたものである。説教の演出のためには「はじめシンミリ（讀題・法説）、なかオカシク（ひ喩・因縁）、おわりトウトク（尊く＝結勸）」などの形式が伝承されてきた。また、説教者に重要なものは、「声（発音、発声、抑揚）・弁（語り口）・才（センス）・博（学識、教養）」と言われてきた。これは簡単に「一・声、二・節、三・男」といって、声がよく、節

<sup>4</sup> 関山和夫『説教の歴史—仏教と話芸』岩波新書 1978年

回しが巧みで、男ぶり（人品）や見栄えがよいこととも言われる。これは清少納言の『枕草子』第三十段に「説教の講師は顔よき」とある。真宗系の説教の講師は日本人の感性に合う七・五調のリズムにのせて、弁舌さわやかに布教したのであろう。

さて、福音主義のキリスト教会で説教と芸能が混同されることはない。しかし、今回の研究会議のように説教の伝達や効果を検討する際、日本人の心に届く話芸について研究は決して無駄なことではない。神戸でルターの小教理問答を七・五調の日本語に訳し出版する準備が進んでいるが、実にマルティン・ルターの手によるドイツ語の小教理問答自身が韻を踏んだリズムカルなものであった。さらに、短くそぎ落とされた小教理問答の本文の言葉は、子どもにわかる単純かつ洗練されたものである。宗教改革当時は教理問答の暗唱と教理問答礼拝が教会規定によって義務づけられていたし、教会では日常的に教理説教が繰り返されていたことを思うと、私たちにも復活させなければならない何かがあるように思われる。

山口氏が最初に紹介する日本で最初の牧師のひとり、奥野昌綱の説教の取り組みに語り手としての高い意識が感じられる。日本語らしく説教をすることに心を砕き、原稿に推敲を重ねた。奥野昌綱は、1877年に日本基督一致教会の設立に伴い日本で最初に按手を受けて牧師となった三人の内のひとりである。奥野は1871年にヘボンの日本語教師となり、次いでブラウンの聖書翻訳の助手となった。そしてバラの「ペテロの拒絶」と題する熱誠溢れる説教によって回心し、五十歳のとき、すなわち1872年8月4日、日本基督公会においてブラウンから洗礼を受ける。奥野はその後、出版物の翻訳や講義などと共にブラウンから説教の姿勢を学んだ。そして和漢の教養に信仰体験を加え伝道の熱意にあふれて日本語らしい説教をし続けたと言う。奥野は三十年間の牧会者としての生活の間、情熱の説教者であった。また、引退後八十歳にしてもなお精神的に全国を巡回伝道を継続するというように、晩年にも同じく情熱の説教者であった。奥野は終生自分の説教原稿を持ち歩き、推敲しては改訂を重ねていたことを山口氏は紹介している。

入船氏は、日本の福音主義の説教者は今後積極的に日本人理解を深めるように提言していた。『福音主義神学』誌第六巻に掲載されている山中良知氏の「日